

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00302

研究課題名(和文) 守覚法親王の蔵書から見る中国典籍文化の日本中世文化への影響に関する実証的研究

研究課題名(英文) Impact of Chinese Book Culture on the Middle Ages of Japan as seen from the collection of Shukaku-hoshinno

研究代表者

池田 昌広 (Ikeda, Msahiro)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70633288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、鎌倉時代初期に仁和寺第6代御室をつとめた守覚法親王の蔵書を復元し、そのうちに中国南宋の出版文化の影響の如何を明らかにしようとするものである。調査の結果、南宋刊本の『経史証類大観本草』を所蔵したことがほぼ明らかになった。そのいっぽう、宋で頻りに印刷刊行された『白氏六帖事類集』は鈔本しか所蔵していなかったらしいことも明らかになった。このような蔵書の構成から、守覚の活躍した12世紀後半において、南宋出版物の日本流入はなお限定的であったという結論をみちびいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代から中世への変革を文化史の視点から見た場合、変革の要因に南宋出版物の受容を数えることは是認されよう。南宋期は商業出版が盛行しはじめた時期であり、中国国内における書籍の数量は格段に増加した。くだんの増加は日宋貿易を介して直接的に日本の漢籍輸入量に影響したはずだ。ただ、当代有数であった守覚の文庫を例にすれば、12世紀後半において南宋出版物の流入はなお限定的と考えざるを得ない。南宋の出版物が本格的に日本に流入するのは13世紀になってからと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study reconstructs the book collection of Shukaku-hoshinno, who was the 6th Omuro the chief priest of Ninna-ji Temple in the early Kamakura period, period, to clarify how the publishing culture of the Southern Sung period in China affected his collection. As a result of the investigation, it revealed that Shukaku-hoshinno collected Keishishorui-Taikanhonzo, which was printed in the Southern Sung period, and that he collected only the manuscript of Hakushirikujo-Jiruishu, even though it was frequently printed in the Song dynasty. By analyzing such a collection of books, it was concluded that the inflow of the Southern Sung publications into Japan was still limited in the latter half of the 12th century when Shukaku was active as the chief priest.

研究分野：東洋史学

キーワード：守覚法親王 顕昭 袖中抄 大観本草 平基親 往生要集外典抄 南宋 資治通鑑

### 1. 研究開始当初の背景

報告者は、「漢籍の受容」という視点による日本文化の通史的研究を構想している。その「古代篇」執筆のための準備をひとまず終え、近年は「中世篇」のための基礎的研究に従事している。平安末期から鎌倉時代にかけて起こった古代から中世への文化的変革の背景に、中国宋代文化の影響があったことは、大方の承認を得られよう。前近代の日本において、海外文化の移入に重要な役割を果たしたのは書籍であった。当該時期についていえば、民間業者による日宋貿易が盛行し、かれらは商品として日本に漢籍をもたらした。また貿易船を介して多くの入宋僧があらわれ、かれらも宋(南宋)において漢籍の入手に努めこれを日本に持ち帰った。俊芿や円爾の将来書はその代表例である。これら日宋貿易あるいは入宋僧によって舶載された漢籍のうちには、宋代の著述も多く含まれ、これらを読解消化することによって、日本の中世文化は形成されたと考えられる。

入宋貿易の研究は近年、大幅に進展した。榎本渉・山内晋次・大塚紀弘・中村翼など文献史学プロパーによって通説の相対化や新資料の発見がなされ、1977年から続く博多遺跡群の発掘によって考古学的な新知見が次々に発表された。ただ、上述のような漢籍の受容に関する問題は十分に調査研究されていない。とくに南宋期に起こった書籍出版の変革から日本中世文化を論じる視点はほぼ皆無といってよい(後述)。報告者はくだんの研究状況をうけ、日宋貿易によってどのような漢籍が舶載されたのか、中世日本における舶載漢籍の具体的様相を究明することを思い立ち、本研究を計画した。

### 2. 研究の目的

中国書籍史において、南宋期は書籍の生産量が飛躍的に増加した時期にあたる。南宋の成立は白河院政期の1127年である。江南の豊かな経済を背景に商業印刷出版が盛行し、民間書肆が多くの坊刻本を出版した。重要なのは、南宋の出版事業の拡大が、日宋貿易の伸長にともない、直截的に日本の漢籍輸入量の増加につながった可能性のあることだ。この増加を定量的に計測することは資料的に困難だが、状況的には合理的な推論と考える。日中の漢籍流通の変化は、いくらかの時間差をもちながらも連動していたにちがいない。つまり古代から中世への文化的変革と南宋の出版事情とに相関関係があった可能性が導けるのである。

本研究はこの相関を実証しようとする試みである。むろん相当な調査期間が必要であろうことは容易に想像でき、ことは効率的に遂行されなければならない。そこで調査対象に選んだのが守覚法親王(1150~1202)の蔵書である。守覚は、雅仁親王(のちの後白河院)の第二子にして、1169年から歿するまで仁和寺第6代御室をつとめた貴人だ。自身多くの著作をものした知識人であり、仁和寺文化圏とも称されるサロンの主宰者でもあった。その地位と好学とは当時有数の文庫を築かせただろうが全貌は詳らかでない。完備していたであろう蔵書目録は、歌書・歌学書を著録した「古蹟歌書目録」を例外にみな散逸した。

守覚の蔵書には南宋刊本が含まれていた可能性が高い。それがどの程度であったか、南宋で頻りに印刷刊行された漢籍がどれほど含まれていたか、あるいはいなかったか、このようなことが明らかにできれば、南宋の出版文化がどれほど守覚の蔵書に届いていたか知ることができる。守覚は当時の大蔵書家であったから、ひいては12世紀後半における南宋漢籍の流入ペースを推知する手掛かりにもなる。

### 3. 研究の方法

守覚の蔵書について蔵書目録からの復元は不可能である。そこで守覚および守覚周辺つまり上述のサロンに属した人物による著作物を調査する。具体的にはこれら著作物に引用された漢籍由来の文章を摘出しその典拠を明らかにする。守覚は自身の蔵書を駆使したはずだし、守覚サロンの知識人も守覚の蔵書を借覧していた可能性が高い。

守覚サロンの知識人の著作としては、平基親『往生要集外典抄』と顕昭『袖中抄』との二書を選んだ。平基親(1151~?)は平安末鎌倉初の官人、顕昭(1130ごろ~1209以降)は歌学者で、ともに守覚に親近した著作を上呈している。『往生要集外典抄』は、源信『往生要集』の漢籍に典拠する語句あるいは文章都合29条について、その用例を博搜した注釈書である。引用漢籍は比較的多彩である。『袖中抄』は、298項にわたり歌語を注解した歌語辞典というべき書で、その博引傍証ぶりは研究者にはよく知られていよう。そこに引かれた和漢の諸書は、のべ数としては160をこえるという。この2書に利用された漢籍を引用文の検討から究明する。なお守覚自身の著作の検討は十分でなかった。

また守覚らが活躍した12世紀後半における漢籍の利用状況を論じるため、それより少しさかのぼった同世紀前半の著作における漢籍の利用実態も調査した。調査対象には当時を代表する学者・藤原敦光(1063~1144)の著作『三教勘注抄』『秘蔵宝鑰鈔』を選んだ。前者は空海『三教指帰』の、後者は同『秘蔵宝鑰』の各注釈書である。空海の漢文作品には漢籍に典拠する語が頻用され、敦光はその出典を大いに究明した。そこで敦光がどれほど宋代の出版物を利用したか。この分析を通して、12世紀前半における南宋出版文化の影響の如何を検討した。

以上の調査検討によって、12世紀の日本に南宋の出版文化がどれほど届いていたか、暫定的な知見が得られるはずである。

#### 4. 研究成果

##### (1) 12世紀前半における宋代出版文化の影響

守覚の時代をいくらか遡った12世紀前半における宋代出版文化の影響はどうだったか。藤原敦光が加注にあたって頻用したのは、『初学記』『蒙求』旧注本の二類書と、『文選』注なかんずく『文選集注』であった。これらは平安以来の博士家の標準的な参考書の域を出ない。そのほかの利用漢籍を一閱するに、南宋の出版物はほぼ皆無である。当時を代表する知識人であった敦光をしてそのような状況であったことから、12世紀前半における宋代出版文化の影響は非常に限定的であったことがうかがわれる。なお『文選』注の頻用は院政期の学問動向と密接に関連している。日本の文選学は『白氏文集』の流行におされ一時衰退し院政期に復興した。敦光は『文選』注を類書のないし辞書的に使用するが、このような利用法は当時の復興文選学の一斑を表していると考えられる。

##### (2) 12世紀後半における宋代出版文化の影響

基親が最も多く引用しているのは『文選』である。しかも基親は『文選』の注文から諸典籍を孫引きしている。『文選集注』の利用こそ確認できないものの、『文選』注のこのような利用法は、さきの敦光と共通する。復興文選学の余波が基親にまで及んだのである。また稀覯の『修文殿御覽』を参照していることから、基親は守覚の蔵書を利用した蓋然性が高い。にもかかわらず、基親が南宋の出版物を利用した痕跡は確認できなかった。なお『往生要集外典抄』の研究は専論が過去に一本あったのみで、本研究は同書の数少ない基礎的研究になるはずである。

顕昭は『経史証類大観本草』の南宋刊本を手にしていたと判明した。同書は北宋末期に成った中国本草学の到達点であり、当時の日本では王家や撰録家のみ所蔵した新渡の稀覯書であった。むろん顕昭の蔵書ではありえず、かれは守覚の蔵した本を閲覧したのである。顕昭は『白氏六帖事類集』をしばしば利用している。しかしそれは刊本ではなく従来伝世の鈔本であったと推される。『白氏六帖事類集』は科挙の参考書として南宋では何度も刊刻されたが、守覚は南宋刊本を有していなかったと考えられる。顕昭も守覚蔵の『修文殿御覽』を参照したようだが、同書は奈良時代から利用されてきた類書で稀覯ではあったが目新しい書ではない。

以上、基親と顕昭との著作から守覚の蔵書のいくらかを復元した。そこからうかがえるのは、当代有数の質と量とを誇ったと推される守覚の文庫でさえ、なお南宋の出版物の所蔵は限定的だったということだ。すなわち12世紀後半においても南宋出版文化の流入は限定的であり、それが本格的に日本に流入したのは13世紀であったと考えられる。13世紀が劃期であることは、南宋出版史からも支持される。南宋はたしかに坊刻本が盛行して書籍の生産量が激増した時期だが、民間書肆の拡大は13世紀初頭ともいわれる。その意味で、12世紀が限定的であったのは首肯できる結論と思われる。

##### (3) 古代中世日本における漢籍史書の受容に関する通史的研究

古代中世日本における中国史書の閲読史を執筆した。正史なかんずく三史が重視された古代から、『資治通鑑』およびその関連書が読まれるようになる中世への変化を論じ、それが中国の史学思想の動向と連動していることを明らかにした。『資治通鑑』関連書が中国で流行するのは南宋以降のことである。当時の出版業の成長により各種の『資治通鑑』関連書(とくに『資治通鑑』のダイジェスト本)が印刷出版され、これが日本にまで及んだのだ。本研究が追及している南宋出版文化の日本への影響を、中国史書を例に実証したということである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 池田昌広	4. 巻 54
2. 論文標題 『三教勸注抄』と類書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学論集 人文科学系列	6. 最初と最後の頁 352-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 池田昌広	4. 巻 26
2. 論文標題 藤原敦光の文選学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学日本文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 池田昌広	4. 巻 68
2. 論文標題 袖中抄と大観本草	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 和漢比較文学	6. 最初と最後の頁 58-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池田昌広	4. 巻 55
2. 論文標題 『往生要集外典抄』出典考 『文選』の利用を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都産業大学論集 人文科学系列	6. 最初と最後の頁 288-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 池田昌広	4. 巻 27
2. 論文標題 『袖中抄』と類書	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都産業大学日本文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 榎本淳一・王勇編 (池田は執筆者)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 未定 (出版地は中華人民共和国)	5. 総ページ数 -
3. 書名 中日文化交流史叢書 第7巻 書籍交流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------